

鉄舟 再復刊第七七号 目次

臨濟録提唱抄録（七）

．．． 垣塚 玄了 2

大森曹玄老大師 三十三回忌

高田玄中老大師 七回忌 嚴修 ．．． 6

日本美の源流を訪ねて（一）．．． 奥田 直心 14

第二維新運動の系譜（四）．．． 岩立 実勇 18

パキスタン旅行記（二）．．． 山本 恵 27

臺南の朝 ．．． 遠藤 真美 35

趣旨

我々同人の誓願は、要するに正見の体现であり、その生活化である。正見とは無我の正覚に外ならない。これこそ、そしてこれのみが、人生の唯一の指導原理である。何人と雖もこれなくして人生を正しく生き得るものではない。

われわれは、この誓願ゆえに、久しく鉄舟会に拠つて互いに切磋琢磨してきた。いまはこの誓願ゆえに、その正見を各自の専門の道を通じて表詮しようと思ふ。禅に、書に、画に、剣に、そして詩に、もとより正見それ自体は絶対的な道理の眼である。ではあるが、一面それは邪見と相対的な境位をも含むものである。その立場においては、われわれは邪見に対しては仮借なく折伏してゆこうと思ふ。

われわれのこのささやかな営みが、願いの彼岸に果たしてよく達しうるか否かは、ひとえに同憂の高士の賛助による外はない。希くば絶大の庇護を賜らんことを。

信条

- 一、われわれは、自己と世界についての正しい見方（正見）と、正しい生き方（正精進）即ち無我の正覚に立つて万世のために泰平を開くべき自覚と責任とを明らかにしよう。
- 二、われわれは安易な妥協を排し、孤高真実の道を独往するとともに、あくまでも師承を尚び、道交を厚くし、万物一体宇宙共生の真理を實踐しよう。
- 三、われわれは一切の悪に対しては仮借なく折伏するが、徒らに世事の非に激して焦燥に陥ることなく、一面風雅の道に逍遙するゆとりを養おう。
- 四、われわれは、自己を真実人体として現成すべく、日常つとめて打坐し、姿勢を正し、呼吸を正し、想念を正し、自己の周辺から漸次世界を正化しよう。

鉄舟禅会同人

臨濟録提唱抄録（七）

提唱 垣堺 玄了老師

抄録 齋藤 健

（一）師、普化を見て乃ち云く、我れ南方に在って書を馳せて瀟山に到りし時、你先に此に在って住し、我が来たるを待つことを知る。我れ来たるに及んで、汝が佐贊を得たり。我れ今黄檗の宗旨を建立せんと欲す。汝切に須らく我が為に成樹すべし。普化珍重して下り去る。

（二）克符後れて至る。師亦た是の如く道つ。符亦た珍重して下り去る。

（三）三日の後、普化却って上って問訊して云く、和尚は前日甚麼とか道いし。師、棒を拈じて便ち打って下らしむ。

（四）又三日にして、克符亦た上って問訊し、乃ち問う、和尚は前日普化を打って什麼をか作す。師亦た棒を拈じて打って下らしむ。

（意訳）

（一）臨濟禪師が普化和尚に会って言った、「私はね、かつて瀟山禪師のところにいった時に、あなたが先にこの臨濟院というお寺で私のことを待っているよと言われたんだ。そして、ここへ来てみると、確かにあなたが私のことを受け入れてくれた。私は黄檗禪師の宗旨を建立したいと思う。どうか一緒にやってくれないか」と。普化和尚は「はい、わかりました」と頷いて退室した。

（二）臨濟禪師の弟子の克符がその後に来て来たので、臨濟禪師は全く同じことを言い、克符もまた「はい、わかりました」と頷いて部屋を出た。

（三）その三日後、普化和尚がやってきて問訊し（合掌して頭を下げ）て、「臨濟和尚はこの間、なんて言ったんでしたっけ」と言った。すると臨濟禪師は、棒を振ってスコーンと普化和尚を打って部屋から追い出した。

（四）更に三日後に克符が来て問訊して、「臨濟和尚はこの間、普化を打ちましたが、なぜですか」と聞いた。そしたら臨濟禪師が同じように棒をポーンと打った。

(提唱)

これは「勘弁」の第三番目です。「勘・弁」というのは「勘案」全身全霊で相手のことを感じ、そして「弁ずる」わきまえて、それを元に行動するということです。勘弁というのは相互作用です。こちらが勘弁したら相手も勘弁する。禅の修行でも、高歩院に来て坐禅して公案やつてるだけでは意味がないのです。みんなで色々やつてる中に相互作用が出てきます。個が生きているのは個を捨てているかどうかにかかっています。なにかを得ようと思っているうちは絶対ダメです。

さて、臨濟禪師は住職として臨濟院に來たわけですが、そこには既に普化和尚がいました。これが問題になるわけです。例えば会社の異動でどこかの部門長に配属されたが、そこには既にベテラン社員がいた。それと同じです。当然ながら臨濟禪師と普化和尚との間で丁々発止が起ころうわけです。これがそれです。火花が飛び散っているわけです。

普化和尚は臨濟禪師の先輩、法の上では叔父にあたります。ですから臨濟禪師は当然ながら丁寧な頭を下げて「どうかよろしくお願い申し上げます」と言ったのが(一)です。頭を下げられれば普化和尚も「わかりまし

た」と初対面の挨拶は終わります。(二)は、臨濟禪師の弟子が追いかけてきた場面です。臨濟禪師が「頼む克符よ、俺も一人だけでは大変だから、お前手伝ってくれ」と、こう言ったわけです。克符は「はい、わかりました」と言って去った。ここまで普通ですね。しかし(三)では、さすが普化和尚です。三日後にトコトコとやって来て、「ところで和尚、この間なんと言ったんでしたっけ」と、かまをかけた。すると臨濟禪師がポコンと打った。そして普化和尚は納得した。

通常、お寺に新しい住職が入るときは二段階の手続きを踏みます。一つは入寺式、もう一つは晋山式です。

入寺は、住職がいるお寺に副住職として入ってくる場合です。そしてその後、いよいよ副住職から住職になるという時に晋山式を行います。入寺式では雲水の恰好で旅支度、網代笠をかぶり脚絆に袈裟文庫をつけて寺に入り「頼みましょう！」と大声で案内を乞うところから始まります。しかし寺の方でも、どこの馬の骨かも分からない者を簡単にに入れる訳にはいけません。「おまえは何者だ」と言ってみろ！俺が点検してやる」と問答が展開されます。新しく入って行く方もビクビクものですが、迎

え入れる方も一体どんなやつが来たのか戦々恐々です。そこに勘弁が働くわけです。その後、副住職として受け入れられて、いよいよこの寺を任せられとなると晋山式になります。

さて、(一)のところは入寺式です。一応顔を見せて「まあいいか」ということで普化が戻ったわけです。

(二)で克符が師匠の後にやって来て、(三)で普化が出てきたところが晋山式です。臨済はまだ若造だし、とりあえず入寺までは良い。何しよう構わん。しかしお前がこの住職になるというなら別だ。俺が点検してやろうじゃないかと普化和尚が出てきたわけです。現代の晋山式でも同じです。すでに副住職として寺に入っているのですが、一旦、寺から出て別のお寺へ行き、その別のお寺から改めて自分のお寺に入り直すのです。しかし入る寺の山門にはドンと構えている者がいて簡単には通さない。本当にお前は住職としてできるのか「何か俺に言ってみろ」と問答が始まり、それを突破してやっと寺に入ることができます。(三)で普化和尚が「あなた先日なんて言ったんでしたっけ？」と聞いた。当然、普化は臨済禪師が「黄檗の宗旨を建立せんと欲す」「汝す

べからく我が為に成禪すべし」と、この二つを言ったことは重々知っているわけです。

それを踏まえて「黄檗の宗旨を建立せんとするために来た」と言ったのか、それとも「俺に助けを求めて一緒にやってくれ」と言ったのか、どっちなんだ？とやった。もし俺が助けなかったら、お前どうするのだ？と、こう聞いたわけです。お前さんはこの土地のことも檀家さんのことも知らない。何にも分からない馬の骨が来て、誰も助けがいなくても、それでも「黄檗の宗旨を建立せん」とやれるのか？と言ったわけです。これが晋山式のときに門前行われる問答です。覚悟を問うたわけです。

では、臨済禪師が普化を打ったというのは一体どういうことか。この「打つ」というのが「先日、何と言いましたっけ？」という普化和尚の問いに対する答えなのです。冒頭で述べましたように禅宗は何かを「得る」のではなく、それを逆に捨てる修行であると言いました。その「捨てる」ということが簡単にはできないから、捨てさせるために「打つ」わけです。バンバンバンバンと打たれる、叱咤されると、気持ちが逆撫でされて腹が立つ。かつて玄中老師が仰いました。「それをぐつと耐えなけ

りや修行じゃないだろう」と。その逆撫でされた気持ちが捨てられるかどうかです。打つというのは、そういう意味があるのです。

臨済禪師はかつて黄檗禪師にしこたま殴られて、大愚禪師のところに行つて大悟しました。だから「打つ」イコール「黄檗の禪」と評判になつていたのでしよう。臨済禪師は普化和尚を打つことで、「俺は黄檗の禪を誇揚するんだ」ということを示したわけです。それで普化は納得したんですね。その後ずつと臨済禪師を助けて臨済宗という一大宗派になるところまでいったというのは普化和尚の力量によることが大きいと思います。いずれにしても、これで晋山式が終わつたわけです。

克符は当然ながら一部始終を知っているわけですが、もう一回、臨済禪師のところに確認しに行ったのでしよう。「普化和尚を殴りましたが、どういうことなんでしょうか」と、そんなに打たなくてもよかったんじゃないですかと、言つたんだと思います。そうしたら、臨済禪師はまた打つた。どういうことでしょう？ これはお分かりですね。打つて打つて打ちまкруるといふことです。天龍一指頭の禪というのがあります。天龍禪師は何を言われても必ず親指を一本立てて、グツと突き出して見せ

るだけだった。何を言われても、これだということでもう徹底してるわけです。臨済禪師はそこを見せたわけです。「俺はこれで行くぞ」「頼むぞ」と、こういうふうに言つたわけです。それで結局、この普化和尚と克符和尚が臨済禪師を強力にバックアップして臨済宗へと発展したのです。普化和尚も見事だし、克符和尚も見事、もちろん臨済禪師も見事です。つき抜けてるんですね。一つ抜けてるから、こういう芸当ができるのであつて、実際こうだったんだろうと思います。

(二〇二六年一月十七日)



イラスト / x x x x

大森曹玄老大師 三十三回忌
高田玄中老大師 七回忌

厳修



四月十一日午前十時より、高歩院第二世・大森曹玄老大師の三十三回忌（冷照忌）と第四世・高田玄中老大師の七回忌（超祥忌）の法要が、導師・垣塚玄了老師（高歩院住職）、維那・高田玄昭和尚（林照寺住職）のもと、厳修されました。

- 一、撃柝五聲支度
- 一、撃柝連声出頭
- 一、開式の辞
- 一、一同合掌礼拝
- 一、半斎献供九拝 拈香
- 一、焼香（大悲呪 世尊偈）回向
- 一、法定奉納
- 一、ご挨拶 鉄舟禅会理事長 石井邦男
- 一、ご挨拶 林照寺住職 高田玄昭和尚
- 一、謝辞
- 一、一同合掌礼拝
- 一、退堂
- 一、閉式の辞

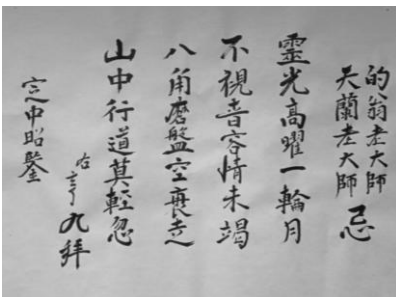
鉄舟禅会道場には、大森家から大森慶子様、樫尾直美様、望月雅美様、佐藤由子様、早部治英様、早部悠美子様、鉄舟禅会から奥田直心顧問、石井邦男理事長、藤井徹副理事長、吉田純子様、久保田卓造様、中村正則様がご参列くださいました。



◆導師・維那ご入堂



◆拈香





◆鉄舟禅会・石井邦男理事長（ご挨拶）



◆林照寺住職・高田玄昭和（ご挨拶）

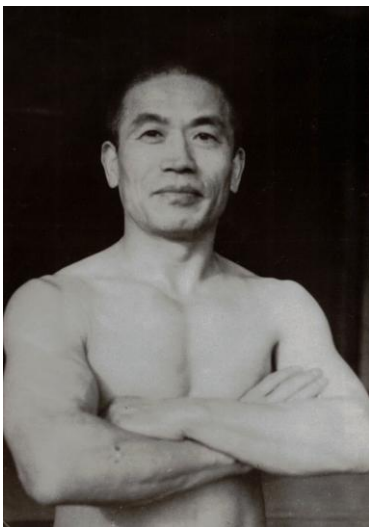


鉄舟禅会の礎を築き、昭和から平成へと発展させてくださった両老大師の深甚なご遺徳偲び、禅の修行と共に書・剣・茶を併修する伝統を令和の時代も守り継ぐことを、固くお誓いする法要となりました。



両然大師を偲んで

大森曹玄老大師（一九〇四—一九九四）



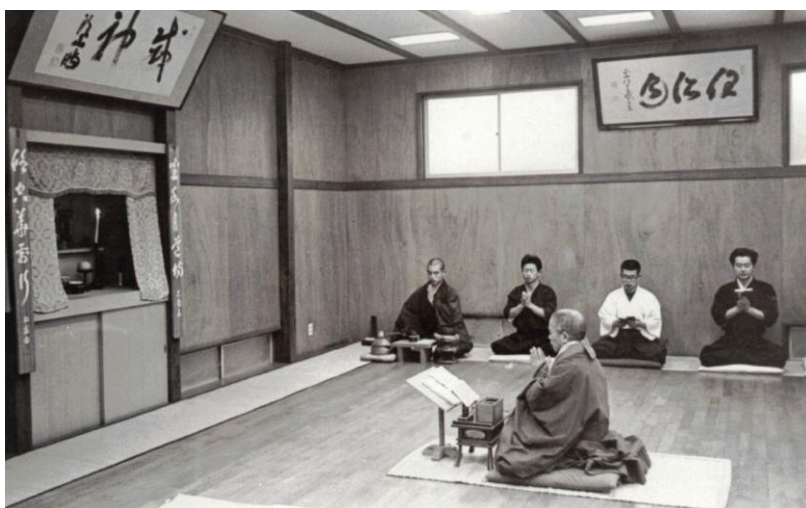
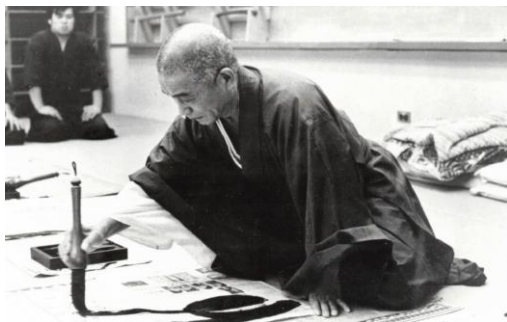
（昭和三十年）



直心道場の前で（昭和十一年）



鉄舟禅会創設時の幹部と（昭和三十一年）



高田玄中老大師（一九三六—二〇二一）



祥福僧堂時代（昭和三十八年）



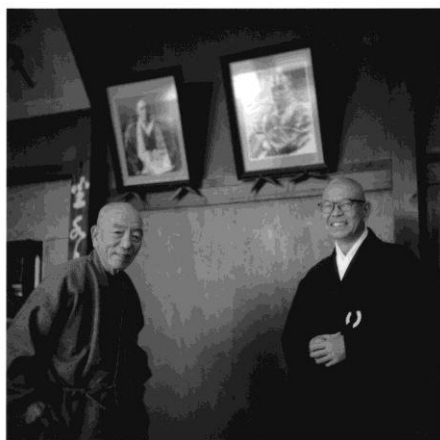
高校時代（昭和二十六年）



曹玄老師と



林照寺にて



垣塚玄了老師へ嗣法 (平成二十九年)



日本美の源流を訪ねて（一）

鉄舟禅会顧問 奥田 直心

日本の芸術の種類は、非常に多岐にわたっています。

日本画、書、墨絵からはじまり、浮世絵、仏像、寺院建築、茶室、陶芸、庭園、織物、日本刀など、その種類と奥行きの深さは、世界に類を見ないといっても過言ではありません。又茶道、華道、剣道、柔道、空手道、合気道等、心と体を鍛える修行の道が芸術と結び付き、さらに間口と奥行きをより深く味わいのあるものになっていることは間違いないと思います。しかしここでは、多岐にわたる芸術の川の流れが、一筋の流れから枝分かれしてその元の所には日本独自の美の根源があるのではないかと考え、今回その根源にせまってみたいと思います。

今から五十年ほど前になりますが、寺山先生と相談して、美学芸術学の勉強をしたいと思い、東京大学美学芸術学部の方道友信先生のご自宅を二人で訪問したことがあります。寺山先生は、書道芸術の美とは何かを、小生は、白隠禅師の五十代の達磨と八十代の達磨の二枚の写真を拡大して焼き付けた写真持っていく、二枚の達磨の違いを論理的に解明したいと願ひ出ました。先生は即座

に八十代の達磨を指されて、こちらの方が良いですねと言われ、ふたりの願ひを聞いて下さり、それから二年間毎週一回大学院のゼミに参加を許され、西洋美学とはどのようにして美に迫ってゆくのか、その入り口を垣間見ることができました。しかし二年間では論文を提出することができず。五十年遅れになりましたが、先生のご恩に報いる為に小論を書くことにしました。

鑑賞眼とは

小生二十代の前半に書を習いたいたいと思い、友人の紹介で門を叩いたのが山田研斎先生のお宅でした。その時は、寺山先生が一階の先生の和室の居間で墨を摺り、一硯墨が摺りあがるとそれを二階の大広間に持って上がり、一本の筆で山田先生、寺山先生、小生の順に半切一行、主に山岡鉄舟居士の一行物の臨書を書いて、墨がなくなるとその日の稽古は終わりになります。先生がその日の一番出来の良いものを下に持って降りて、鉄舟さんの書の横に並べて、寺山先生とその出来具合を話すのです。

お二人は、墨気の良し悪し、線が澄んでいくか、線の強い弱い、気合が通っているかどうか、等を話されているのですが、自分にはその話の内容がまったくわかりま

せんでした。そして自分が何もみえていない、明盲であることを思い知ったのです。それから約五年、お二人の会話に加わることなく、話の内容を理解しようと努力をしましたが、中々わかるようになりませんでした。よく生まれながらに才能に恵まれた人がいますが、自分は何の才能も持たずに生まれてきたのだということを自覚させられたのです。後日その話を山田先生に話したところ、「それは才能の問題ではなく、境涯が深くなれば今まで見えなかった事が少しずつ見えて来るのです。見えないのは境涯が深まっていないからです。坐禪の修行を命懸けでやれば、見えないものが少しずつ見えてくるのです」とのことでした。

日本美の根源に迫るためには、どうしても何が良く、何が良くないのかが解らなくては源流を辿ることはできません。そこで鑑賞眼とは何か、どうしたら鑑賞眼が身につくのか、小生の経験もふまえて述べたいと思います。どうして見える人と、見えない人がいるのでしょうか。よく世の中には、絵はわかるけど書はわからないとか、絵画はわかるけど音楽はわからないという人がいますが、自分はこういう人が本当にわかっているのか疑問に思うのです。的翁老師はよく色眼鏡を全て捨て去りなさいと

言っておられました。この色眼鏡が問題です。自分なりの判断基準のことを言われているのだと思います。学校で受けた教育、自分で勉強したこと、社会に出て学んだこと等等、自分なりの判断基準をお持ちになっていると思います。芸術作品に対するとき、これらの判断基準が働いて良し悪しを分別してしまします。色眼鏡を捨てなさいということは、この分別することをやめなさいということなのです。ですから分別を働かせている人は、自分なりの尺度で作品をはかっているのです。自分の尺度を超えた処は見えないのです。

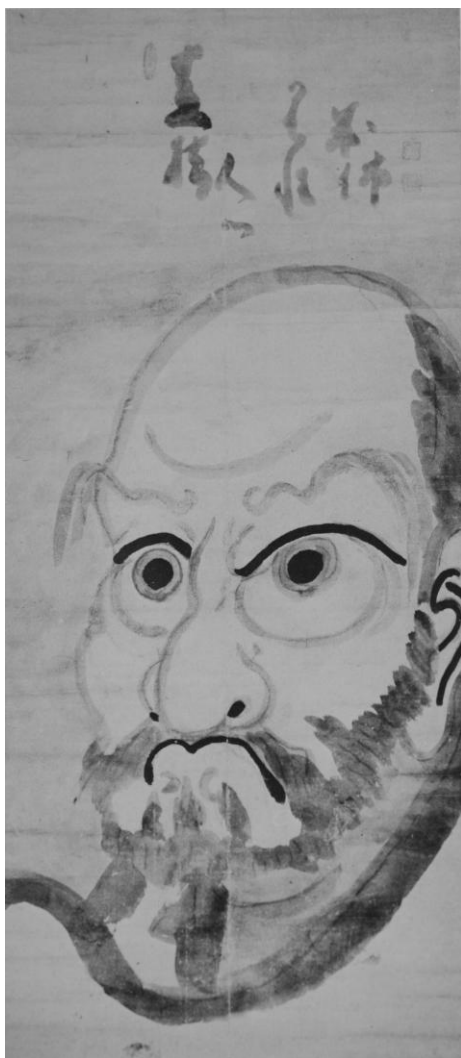
鈴木大拙先生は、『禪と日本文化』（鈴木大拙全集第十巻）の中で「直観」という言葉を使っておられますが、これは雑念を交えない、瞬間的な五感の働きのことを言っておられるのです。即ち分別心が働く以前の五感の働きのことです。それでは直感で対象に接すれば、全ての人が見えるようになるのでしょうか。長い間修行を積み重ねた人の直感と、まるで修行に縁のない人の直感と同じなのでしょうか。同じでないなら両者の直感にどのような違いがあるのでしょうか。大拙先生は、同じ『禪と日本文化』の中で、「二即多、多即二」と書いておられます。この言葉は、多くの人がその著書の中で解説してお

られますが、先生は次のように述べておられます。

『一即多、多即一』という句は、まず『一』と『多』という二概念に分析して、両者の間に『即』をおいてはならない。ここでは分別を働かせてはならない』また続けて、『般若経』に、『諸心皆爲非心、是名爲心』というので、要約して『即非の論理』としておく。つまり『心は心に非ざるがゆえに心なり』で、否定が即ち肯定で、否定と肯定とは相互に非の立場にある。絶対に相向かつて立っているが、この『非』の立場が、直ちに『即』である。自分はこれを禅の論理というのである。『即非』はまた『無分別の分別』『無意識の意識』でもある。』と述べておられます。二元相對の世界を離れ、自我を滅した世界、そこは空の世界であり、一と多とお互いを包含しつつ、否定と肯定が自由無碍に作用しあう、臨済の四料揀の世界が展開されるのです。しかしこの見処を鑑賞眼の説明に用いるのは、少し無理があると思います。大拙先生がなぜ日本文化の説明に一即多をもつてこられたのか、小生の理解をこえたところがあります。それよりは相即相入のほうが芸術論を展開するのに適していると思います。釈尊が、暁の明星を見て、星が光っていると思ったら、自分が光っているのだという逸

話が残っていますが、この状態が相即相入なのです。一が空にして多を包含する、そこに一はなく一に映し出された多があるので。その時多の全体が見えるのです。しかしこうなるためには、分別をやめ、二元相對の世界をはなれ、絶対無の世界に入する必要があります。作品の全てが自己に投影された時、二元相對の世界を引きずったままの作品なのか、彼岸に渡った境界の作品なのか、一目了然にわかるのです。これが鑑賞眼の眼目であり、従つて修行により境界が深まるにつれて、今まで見えていなかったことが見えてくるのです。それは丁度富士山を登るがごとく、高く登れば登るほど景色が広く、よく見えてくるのと同じ道理です。従つて鑑賞眼を得るためにはどうしても白隠禅師の言うがごとく、八識田中に一刀を下し、小さな自我の殻をぶち破る必要があるのです。それ故に芸術作品の良し悪しが判る能力は才能ではなく、だれもが持っている真実の我に目覚めることなのです。この鑑賞眼が手に入れば、絵画、書、墨絵だけでなく、音楽、彫刻、その他多種多様な芸術作品の良し悪しが自然にわかるようになります。自分が作品に対しての限り、決して芸術がわかるようにはなりません。作品と一つになって、初めてわかるのです。

(つづく)



※白隠禅師の達磨図

あなたの鑑賞眼では、どちらが 50 代で、どちらが 80 代ですか？

第二維新運動の系譜（四）

（前原一誠、二・二六事件、大森一聲）

岩立実勇

九 松下村塾党の萩の変

鉄舟禅会の石井邦男理事長が、農家から突然幼稚園の園長となるにあたり、年配のベテラン女性から吉田松陰先生の本を読むように薦められたと伺った。

その偉人・吉田松陰を幼少時より教育し、その人格形成に大きな影響を与えたのが、叔父の玉本文之進である。文之進は、松陰亡きあと紆余曲折があり、閉鎖同然の状態であつた松下村塾を明治五年正月から再興・主宰しており、明治九年の前原一誠の萩の変にはその塾生が多数参加し、文之進自身は前原の義挙の失敗を悟つた十一月六日に、東光寺の玉木家墓前で割腹して果てた。

玉本文之進の自刃については、通常「是れ平素の教育其の宜しきを得ざるの致す所なり、何の面目ありて父兄に對し、且つ子弟を教ふべけんや」と、自分の子弟が萩の変に加わつたのは「その教育宜しきを得ざる」ため、その責任をとつて自決したと、吉田庫三ら吉田家・杉家は主張し、玉木家と親戚関係のある乃木希典も同じ立場を

とっている。これは玉木ひいては吉田松陰の名譽を庇ふための言だろう。玉木が自刃の際に云つた「萩の正氣ここに尽きたり」の語は、素直に読めば萩の正氣＝松陰の衣鉢を継ぐ前原一誠とその与党となるであろう。乃木自身、弟で文之進の養子になつた玉木正誼からの前原党への勧誘を断るに際して、正誼に「前原党に参加して父の孝子たれ」と云つたと伝えられている。乃木が、後年宮内省から玉木に贈位の内儀があつた時に、常に玉木の高風を追慕し、毎年祭祀までしながら賛成されなかつたというのも、当時の玉木の立場を考えてのことではなからうか。

松陰亡き後、一時松下村塾で教鞭を取つた馬島甫仙の最晩年の門人で、玉木の塾にも学んだ椿東小学校初代校長の信国顕治翁の談では、「前原の乱と人はいうが、暴挙は前原自身の決起からではなく、主動者は松陰の叔父玉本文之進だと見てよい。東光寺前住職加藤松嶺のいうには、当時通心寺（松本上野）に居て玉木先生に受講していたが、前原・奥平ともに再々先生を訪問し談義を交わしていた。その都度受講時間の短縮を食つたとのこと。玉木翁は守旧派の重鎮で太陽曆を嫌い、太陽は常に日であり太陰は月だ。何月何日というるのは、太陰を重ん

ずるからだ。てな具合の人だもの」という程である。

以下は、北村知紀の論文「玉木氏文之進はなぜ自刃したか・萩の乱への関与について」からの引用であるが、松陰門下、天野御民「玉木翁の屠腹」は、「一誠の事を挙るに方て、少年輩翁に問ふに一誠に与みするの可否を以てす。翁答て曰く、可なりと」「事敗れし後翁謂らく、我の一言を以て多くの子弟を誤り、或は戦没し或は罪辟に陥れり。此輩に対して義独り生く可からすと」書いている。

『吉田松陰全集』の編纂委員も務めた安藤紀一は、杉民治（松陰の兄、文之進の甥）と書簡の往来もある仲だったが、「玉木こそ前原の後援者なれ。一言も勧めたることなしとは虚飾も甚し。杉民治氏は何故これを隠すや勧めたりとて恥づべき事にあらず」（『静宇雑纂』）と激しい口調で論じている。

萩の郷土史家・松本二郎も「私は（玉木が前原の）有力な援助者であったという古老の話を信じる」と書いている。

この玉木文之進が主宰する明治の松下村塾から、養子の玉木正誼の他、吉田松陰の跡を継いだ吉田小太郎（兄民治の子）、杉相次郎（民治婿養子）が、前原党に参加

し、玉木も吉田も戦死している。この三人は前原の弟の佐世一清とも仲が良かったことが、「吉田小太郎日記」から伺える。佐世が二十五、玉木が二十四、吉田が十九、杉が十八であった。

ことに吉田小太郎は、「兼て亡父（松陰）ノ志攘夷ニアリテ又実ニ生命ヲ投チタルコト故、責テ攘夷心ノ種一粒ナリト残シ置度ト申旁玉翁（文之進）ノ説ヲ聞込ミ、亡父臨終ノ和歌・留魂録ノ末数首ノ歌等モ腸ニシミコミ、前原党ノ志ハ攘夷ニアルト心得」参加した。

この他、前原の父佐世彦七は、松陰門下渡邊蒿蔵によれば、松陰の松下村塾へ時々来ていたということであるし、松陰門生からは、近代萩焼を代表する名工として名高い九世坂高麗左衛門、坂次郎熊後の道輔が、武器を携帯して前原党に身を投じている。道輔は、松下村塾幼年組の一人として、吉田松陰が江戸へ護送される直前に薫陶を受けた。久保（五郎左衛門）塾と掛け持ちで学んでいた道輔が、久保家の裏門から出て来るのを、松陰がはるかに手招きをしながら迎え入れ、書物挟みの紐を肩から外してくれたという。萩の変で放免になった後、明治十年に九世坂高麗左衛門を襲名、技術、学識を備えた温厚な人物であったとされている。

玉木・吉田・杉の他に、玉木塾の塾生で変に参加したことが明確に分っているのは、今田浪江（二四）、児玉真信（二〇）、重富豊太郎（二六）、佐々木梅之進（一八）、南秀一（二八）、倉橋久槌（二六）、宇野義光（二三）、重見良材（一九）の十一名である。更に、前原党幹部から横山俊彦（二七）、佐世一清（二四）、大和魂一（二〇）等が玉木の講義を聴講している。この内、倉橋久槌、重見良材は杉家の親族であるが、倉橋の父直之助は、松陰門下であった。重富豊太郎は、母親が前原の妹いくで、父親の与三と共に参加している。児玉真信は後に妻の実家の重富与三（豊太郎父）の家を継ぐとあるのを見ると、豊太郎とは義兄弟となり、共に前原の親戚になる。

玉木正誼、吉田小太郎が戦死している他、重富豊太郎と倉橋久槌が重症、重富は収容された病院で死亡した。わずかに十六才での参加であり、伯父の前原は東上した船中から父与三に宛てた書の中で、「豊太の生死未だ知れず可憐なり」と云い、処刑前の遺書で、「重富豊太の様子さつぱり相分り申さず、きづかひ候」と心配をしている。

杉民治は、変には参加しなかったが、明治八年二月八日の前原日記に、「杉民治訪来、置酒疎闊之情を話す、

予終酔、吏を怒り世を罵る、民治亦興に乗じ胸中之秘を發す」とあり、前原の憂国の情に同情するところがあつたことは確かの様だ。前原の蹶起後に、政府側の品川弥次郎が木戸孝允に送った書には「杉民治は三十一日の朝萩を發し、山代に出張、くさいくさい」とある。「吉田家を継いだ長男小太郎はもちろん、養子杉相次郎、玉木家の当主正誼ら一族総出のかたちで参加していた時期における、彼のとつたこの奇妙な行動は、いささか理解しがたいものである。山口県庁の役人としては、このまま萩に留まり、反乱分子を説得して解兵に努めるか、もしくは直ちに県庁へ駆け付けて討伐の方策を講ずるべきであるが、そうした努力をした形跡はまったくない。戦闘が始まって数日間の傍観は、むしろ前原党を様々な面から支援した疑いが十分」（海原徹『松下村塾の明治維新』）あつた。その為、十一月二十八日には、「賊徒に係あるを以て」第三大区々長の職を免ぜられている。しかし、民治が記した「吉田小太郎伝」では、「実父（民治）モ斯迄事ノ迫ラヌ内、諸師友ノ忠告ヲ感シ、一昨年来小太郎自分ノ志モアル事ナレハ、玉翁ノ処ハ脱走ノ姿ニナシテモ東京遊学ヲ許シタラバ、仮令大学業ハ出来ズトモ、責テハ非常ノ死ハ免カルヘキニ」と書いており、

玉木文之進の塾を脱走させてでも東京遊学に行かせるべきであつたと後悔している。また、小野述信の書簡によれば、民治は、「前原己の不平よりして大逆を企て満城之人民を悩し人の子弟を死地に陥れ其身ハ兄弟を始め脱走致し不義不勇朝廷ニ対し奉り不忠親ニ不孝何も申すべき様なく大恐不動之極」と前原を非難した様だ。これらは変後に書かれたものであるから、民治の自己保身、松陰吉田家はじめ玉木家・杉家の名譽と家名存続のため、実子を亡くしたことへの後悔などがあつたのであらうが、その豹変ぶりに鼻白む思いがする。安藤紀一の「杉民治氏は何故これを隠すや。勧めたりとて恥づべき事にあらざ」という憤りは、玉木文之進の問題だけでなく、杉民治その人に対しても向けられたのであらう。

明治九年一月二十九日の松下村塾の新年の發会式には民治も「孟子」を講じているし、彼はまた文之進と同様に太陽曆採用に対する批判者であつた。そのため小太郎の日記が、新曆の下に必ず旧曆の月日を記していること、明治八年十月二日付の彼の書簡では、上京して洋学を学びたいと訴える小太郎に対し、「官途の望も、洋字を読み候人計ニ相成るべきとも相考へられず候、筆達者ニ廻り、算法心得候而、漢字自在に読め候ハハ、随分官途之

御用ニも相立つべし」と、自らも小太郎の上京に反対し、漢学を勧めているのである。

また、黒川村の森田家は吉田松陰の養母即ち吉田大助の妻久満の実家であるが、村の戸長である当主の森田猪助は、浜田へ向かう前原一行をもてなしている。

一方、前原家に目を向ければ、一誠、山田穎太郎、佐世一清の三兄弟、先に述べた前原の妹いくの夫重富与三とその子豊太郎、与三の娘の夫児玉真信が變に参加、三兄弟は斬首、豊太郎は戦死、わずか十六歳であつた。尚、三兄弟の父彦七は、警吏に捕縛されることを潔しとせず自尽して果てた。当に一族勤皇の好模範である。

以上の事から、萩の變は松陰の一族吉田家、玉木家、杉家に前原一族が参加した「正統松下村塾党」の義挙であつたと言えるのである。

松陰が処刑された際、前原は「先生既に忠義に死す。余門生たり。遺志を奉じて忠義に死せざれば何の面目ありて地下に先師に見えん」（「病蓐筆語」）と、忠義に死すことを心に誓っていた。そして、その誓いを常に胸に秘め、十八年後に見事に実行したのである。

因みに、萩の變で戦死した玉木正誼の遺腹の子正之（母は松陰の兄民治の長女豊子）は、乃木が引き取り我

が子同様に育てたが、戦前に大森老師が直心道場を建てたのは、この玉木の土地であつたと何かで見た記憶がある。この稿を書くにあたって再度調べてみたが、いまだ何処に記してあつたか特定できていない。

十 長州の前原一誠と会津藩

鉄舟禅会の先輩である金子恵さんが書道展に来られた際、会津出身だということを伺った。また私のこの連載を楽しみにして下さっていると仰つていただいた。そこで前原と会津の関係について述べておきたい。

戊辰戦争で敵対した長州と会津は一六〇年近く経つた今も不仲であり、萩市と会津若松市の市長は公の場では握手はできない、また両地の出身者同士の結婚は難しいとさえ言われている程である。その様な中唯一の例外は前原一誠である。

連載第一回目で述べたが、前原は、幕府への忠義を尽くし、籠城して抵抗した会津藩に対し、「胸中に一点の趣味あるに似たり」と述べ、会津藩士の武士としての精神と姿勢に共感を寄せていた。旧会津藩士等は木戸孝允や西郷、アーネスト・サトウに会津松平家再興を依頼したが、最も力を尽くしたのは前原であつた。その御礼と

して家老山川大蔵（浩）は、落城の際に自ら小柄小刀で切り取つた天守閣の襖絵『泰西王侯騎馬図』（重要文化財・神戸市立博物館蔵）を贈呈したと前に記したが、『会津詩史談』第五十九号の坂井正喜「『流転の王侯騎馬図』と前原一誠について」によれば、当時江戸藩邸にあつたという公算が大きいとのこと。一説には前原が会津から分捕つたという話もあるが、前原家には「この屏風は会津藩主の除名嘆願に尽力した御礼に戴いたもの」と伝わっており、それが真実に違いない。

前原は盟友である奥平謙輔を通じ、会津藩家老山川浩の弟山川健次郎（後に東大総長）や小川亮（後に陸軍大佐）ら会津藩の子弟を教育のために託されたことから、河井善順、小出鉄之助、永岡久茂等旧会津藩士と親しく交わつた。この永岡が後に萩の変に呼応して同藩士竹村俊秀等とともに思案橋事件を起こすこととなる。

山川浩が広沢安任、小出鉄之助を同行して、前原・奥平と懇親の宴を催した際、その席上山川が前原と奥平に、その席には謹慎中で不在であつた永岡の才気学力を称賛して紹介し、これが永岡が前原、奥平と親交を結ぶ発端になったという。

この頃、永岡はまだ面識のない前原に詩を贈つて、二

十三万石の領地から下北半島の三万石の藩に移住を余儀なくされた旧会津藩士たちの飢寒を訴え、救済を請うている。旧会津藩士の中に、前原が情に厚く、「然諾を重んずる人」という評判があつたのであろう。

前原一誠・奥平謙輔と会津の河井善順・広沢安任・永岡久茂五人の集合写真が残っているが、これは明治二年九月ごろ、永岡も前原や奥平と面識を持つようになり、奥平謙輔が長州へ帰国するのを機として記念撮影したものでないかと云われている。

河井善順は、会津にある浄土真宗本願寺派真龍寺の第十世の住職である。この善順が京都の西本願寺に留学し、その学寮に入っているとき、禁門の変が起きた。焼失を免れた西本願寺に、長州藩の敗兵が逃げ込み、追跡してきた会津藩兵が、寺側にこれを突き出すように要求するが、寺は頑として応じなかつた。言うことを聞かない坊主たちに腹を立てた会津藩兵は、ついに寺を焼討ちすると騒ぎ出した際、この会津出身の善順が、会津藩公用人の野村左兵衛に熱弁をふるつて説得し、事なきを得た。この長州藩の敗兵の中には、品川弥二郎や山田顕義もいた。

会津藩が降伏した際、参謀奥平謙輔がかつて萩の明倫

館でその漢学の講義を聴講し感激した秋月悌次郎へ、書を送った話は有名であるが、その書を託されたのが河井善順だつた。その書の主意は「徳川家に尽した忠節を、今度は朝廷に尽してくれまいか」というものであつた。

「逆賊」という汚名を与えられ、更に降伏により前途に絶望していた秋月や広沢安任、永岡ら会津藩士らは、この手紙を読んで痛く感動したという。秋月はすぐに答書をしたためたが、直接会つて手渡したいと思い、河井に相談した。この時秋月は、猪苗代に謹慎中の身であり、脱走が露見したら死罪であつたが、秋月と小出鉄之助は河井の寺僕に変装し脱走、越後の水原で無事奥平に再会を果たしている。

そこで会津藩の将来を担わせるべく、山川健次郎や小川亮ら会津藩の子弟の教育を奥平に依頼したのである。一旦猪苗代に戻り、この二人を奥平の元に送り届けたのも河井であつた。この時は同行の二人が関門で斬殺された事実をみれば、如何に決死の行だったか分るであろう。維新後、東京に出て、山川浩を奥平と会談させ、前原に結び付けたのも河井である。「維新の後、上人（河井善順）東京に出で、會長両藩の間に往来して周旋甚だ力む。屢々藩相山川浩を藩邸の幽居に訪ひ、或は暮夜奥平

先生を此に導き来りて、浩と会談せしむ。又時々（前原）一誠・（大村）益次郎等と酒樓に会见せり。」（山川健次郎「河井善順上人の傳」）

前原の頑固なまでの誠実さが、同じ氣質を持つ山川と意気投合する部分が少なくなかったと云われる。

前原は、会津藩に対しては終始同情的だった様で、蹶起の前、明治九年一月二十八日の日記にも（今田）濤江云、客冬（旧冬）青森人士百名計餓死ス」と記している。

会津藩士小川涉の『志ぐれ草紙』によれば、「（前原一誠は）我が公家（会津藩）再造の為には力を盡してくれ、それがためには河井善順、小出光照（鉄之助）、永岡敬次郎（久茂）等最も親み」、「一誠が終に職を辞して帰国するに際したれば、河井が宅にて別筵を開き予及び南寅次郎等対酌せしが、木戸等は実に貴藩に取り害をなしたるものにて、同藩（長州藩）の名には耻ぢ入りたることなれば彼は我が同藩人と思ひ給ふなかれといへき、初め小出が木戸に面して老公（容保）幽屏（閉）の解け給ふことを内請せしに、木戸は答へもせず床間の軸を見て小声に詩を吟しゝかば、小出憤怒に堪へざりしが強ひて抑へて帰るときと語りしことありまた前原が言を証すべし、

前原また戯れて曰く、今日本国を統御する御公家様が漢訳の万国公法や西洋事情を以て処弁せられては実に危うき事なり抔いへき、前原は怜悯なる人とは見えざれど然諾を重んずる人のやうなれば、木戸と合はず抗抵せしは理の然るべき所にて……とある。事件後の竹村は口供書にて「自分考フルニ前原一誠ハ一二度ノ面識ナレトモ其ノ人ト為リ実着ニシテ志操温厚国家ノ為メ誠忠ノ士」「斯ノ人コソ死生ヲ共ニスヘシト平素自信ス」とあるように、永岡や竹村俊秀は前原の人となりを敬慕していたが、次に記す理由によりその思想よりも反政府、その一点で前原と提携したと思われる。

大正六年発行『會津會々報 第十一号』によれば、永岡は「旧藩の為め善後の計を為んとし、（青森県史の）職を辞して東京に上り、周旋尽瘁する所あり、既にして政府の処置を視て甚だ意に満たず、長州の前原一誠、奥平謙輔等と相交り、意気相投ず、乃ち同志者薩人海老原穆等と謀り、評論新聞、中外新聞、江湖新聞を続発し、頻りに政府を攻撃し、毫も仮借する所なし、為に皆発行禁止せらる、蓋し本邦に於いて政論に係る雑誌の発行之を嚆矢とす、当時の名士殆ど君を識らざる者なく、副島種臣、板垣退助、林有造、大東義徹、大橋一藏等の諸氏

の如き最も親交あり、一旦伊藤工部卿、井上大蔵大輔、君が寓居を訪ひ、任官を勧説す、君遂に応ぜず、君慨然として同志者に謂て曰く、薩長人、名を王政復古に籍りて徳川幕府を仆し、反て政権を竊み、私利を貪り、苛斂誅求蒼生を塗炭に陥れ、天下の怨府と為れり、而して外国の侮慢を受ける日一日より甚し、有栖川親王建言中に曰く、維新の鴻基一朝にして土崩瓦解の勢ありと、鳴津久光公の建言にも亦曰く、皇国は終に西洋各国の奴隸と為ること昭々たりと、実に危急存亡の秋たる以て知る可し、且や我が藩忠節の士報国の為に戦死したる者千数百人、而して今日の状斯の如し、実に徒死と謂ふべし、是れ豈に袖手傍觀すべきの時ならんや、既に言論以て之を矯正すべからず、寧ろ力を以て政府を顛覆するに若かず、彼の前原奥平等の意見も亦余と一致す」と述べている。永岡等旧会津藩士の政府顛覆の理由は、唯一点、「我が藩忠節の士報国の為に戦死したる者千数百人、而して今日の状斯の如し、実に徒死と謂ふべし」、この一点に尽きるだろう。これが為には、永岡にとつて西洋近代文明批判だろうが、尊皇攘夷だろうが、自由民権だろうが、征韓論だろうが、何でも構はなかったのかもしれない。

前原から蹶起の電報を受け取った永岡等同志十八名

(一説に十四名)は、十月二十九日東京・思案橋(日本橋小網町)から千葉の登戸に向けて出航しようとしていたところを、通報により駆け付けた警官隊と切りあいとなり、永岡ら数名はその場で逮捕された。逃走を図った者も中根米七を除き、順次逮捕されている。逃走した内の一人、木村信次は、同志松本正直と満木清繁と出会い、越後の大橋一蔵を頼らんと三十日夜東京を発するが、十一月四日、越後長岡に至ったところで警吏に捕縛された。永岡はこの時の傷が元で翌年一月に獄中死し、井口慎次郎、中原成業、竹村俊秀の三名が斬罪となつた。逃れた中根も明治十一年、会津喜多方町で自刃している。

死んだ永岡は家族がなかったため、かつて留学の世話を受けた関係から、山川健次郎が金を工面して遺骸をひきとったという。

永岡らの口供書によれば、計画では千葉県庁を襲撃し「豫テ民を虐スル聞ヘアル」県令等を殺害し公金を奪つた後、佐倉の東京鎮台歩兵第二連隊を説得して、宇都宮から日光に立て籠り、旧会津藩士の蹶起を促し、前原に呼応して政府を顛覆する予定であつたという。

尚、綱淵謙錠の小説『苦』にも引用されているが、先に引用した『會津會々報 第十一号』にある、当時警視

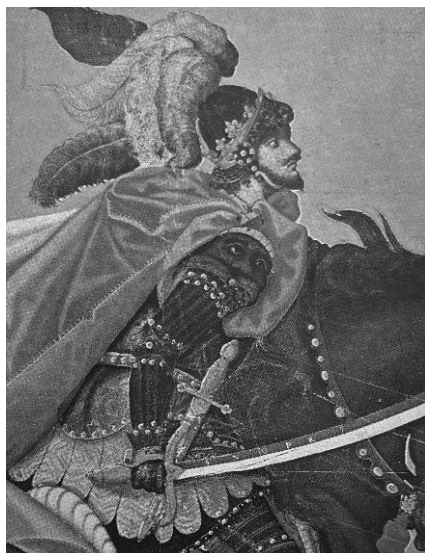
庁赤坂署の警部の旧会津藩士石井収の回顧談によれば、
「偕此事件は何に依りて発覚せるかと云ふに、永岡君の
宅に会津藩士の平山主一郎、根津金次郎と云へる二人の
書生あり、久しく同家に寄食し、師恩を受けたりしにも
拘らず、事件の前夜川路大警視を訪ひ、委細密告に及び
たり」とある。

『雑記』と題された山川健次郎の自筆メモ帳によると、
「健次郎はその中で永岡の書生であつた根津金次郎と平
山主一郎を裏切者と告発し、〈大〉と呼んで憎しみをあ
らわにしているが、その項の末尾に割註の形で次のよう
に書き込んでいた。〈根津ハ永岡氏の妾を己が妾とせり
と聞く〉と。(綱淵『苦』)

ところで故青田國男元宮司の下、松陰神社によつて纏
られた『前原家寄贈資料目録』によれば、一誠の妻綾子
宛山川良子(健次郎長男洵の妻)の大正七年三月十七日
付の書簡に「過ぐる日父事御地へまゐり候みぎりは、は
からずも御家皆々様殊に御後室様に御目もじえ候」とあ
り、長州の前原家と会津出身の山川家の交流が後々まで
続いてゐたことが分かる。

会津と言へば、大森老師の盟友にて直心道場に直前ま
で起居し、二・二六事件に参加、処刑された渋川善助も

またその出身であつた。



「泰西王侯騎馬図」の部分

パキスタン旅行記(二)

山本 恵

【三日目】

三日目の朝は、ブトカラという仏教寺院の見学から始まりました。現地ではスワット博物館の館長と副館長が出迎えてくださり、遺跡を案内してもらいました。ブトカラはガンダーラの中心地のひとつであったスワット渓谷にある重要な遺跡のひとつです。紀元前三世紀に遡るアショーカ王の時代の仏塔があること、その周りに二百七十二もの奉獻塔があったことで知られています。ブトカラには僧院もあつたそうですが、すでにその上には住宅が建てられており、発掘されていません。

遺跡の中央にある仏塔の周りは、人が右繞（うにょう）するための道が作られています。インドでは古くから「右は尊い方向」とされ、聖者や神聖なものに対して右の肩を向けてまわるのが礼儀とされているそうです。日本ではあまり馴染みがない礼拝作法ですが、現在でもタイやスリランカなどのテラワダ仏教圏では日常的行われる礼拝作法だそうです。私も、時計回りで仏塔の周りを回ってみました。



(ブトカラにて)

ふと足元を見れば、青く光る石が見えます。ラピスラズリだそうです。昔は、このように色鮮やかな鉱石で、仏塔の周りを装飾していたそうです。今は黒ずんだ石も、往時は様々な色に彩られた場所だったのかと想像します。

その後、スワット博物館を訪れました。館内に入ればガンダーラ石仏や美しいレリーフがズラリと並びます。これらは、まさに前日に見たタクティバイや、今朝行ったブトカラ遺跡から出土したものです。ガンダーラ石仏は片岩（へんがん）という、ガンダーラのあたりで出土する石を使って彫られています。



（細かい彫刻が施されています）

スワットで昼食を済ませた後、我々はペシャワールへ向かいます。ペシャワールは、パキスタン北西部の大都市のひとつで、今も商業・交通・文化の中心として重要な町です。その歴史は古く、古代は「人々の都（プルシャプラ/Purushapura）」と呼ばれ、ガンダーラ仏教文化が花開いた町でもありました。

ペシャワールの中
心部に入ると、煉瓦
造りの建物が並び、
久保田早紀さんの
「異邦人」が聞こえ
てきそうな雰囲気
です。異国情緒溢れる
その景色は見飽きる
ことがあります。
バスは町中を進み、
降ろされたのは、墓
地でした。こんなと
ころに何があるの？



（ペシャワールにある墓地の一角にて）

五分ほど進むと、ぽっかりと空いた一角がありました。ここは、かつてガンダーラ一帯を治めたカニシカ王が建立したとされる仏塔があった、シャージ・キ・デリーという仏教遺跡です。現在、目に見える遺構は何もありませんが、当時、ここを訪れた三蔵法師の法顕さんは、このようにその仏塔を記述しています。

高さは四十丈あまり（およそ百二十メートルほど）で、さまざまな宝石によって美しく飾られていた。

これまで多くの塔や廟を見てきたが、この塔ほど壮麗で、威厳に満ちたものは一つとしてなかった。伝えられるところによれば、閻浮堤（人間世界）にある数多くの塔の中でも、この塔こそが最もすぐれているという。

王がこの塔を建て終えたとき、高さ三尺ほど（約一メートル）の小さな塔が、大塔の南側に自然に現れたのだという。

（法顯『法顯伝・宋雲行紀』長沢和俊 訳注、東洋文庫）

一九〇八〜一九〇九年に行われた考古学発掘調査の際、この遺跡から仏舍利容器が出土しました。容器には、古代ガンダーラで使われていたカロシユティ文字で「カニシカ王の元年にカニシカ寺に奉獻された」と記されており、伝説の仏塔が実在したことを裏付ける発見となりました。容器はペシヤワール博物館で現物が保管・展示されています。

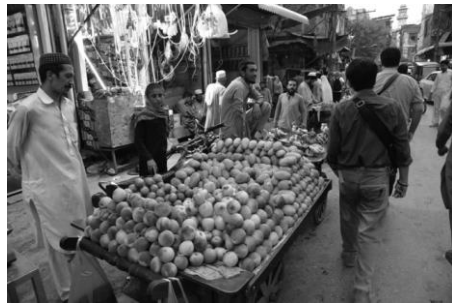
その後、賑やかなバザールを歩きました。最初に目に

飛び込んできたのは、住宅の窓を飾る美しい木枠。昔の裕福な貴族たちの家だそうです。細かい彫刻と、美しいデザインに思わず見惚れてしまいます。



（木枠の装飾が美しい住宅）

バザールでは、街の活気に触れました。カメラを向けると笑顔で手を振りハローと話しかけてくるパキスタンの人々。積み上げられた川魚、新鮮な果物、チャイを飲みながらの井戸端会議。生き生きとした人の営みを感じたバザール見学でした。



【四目目】

四目目、ペシャワール博物館を訪れました。ガンダ
ーラ美術の最高傑作ともいわれる仏像やレリーフがずら
りと並びます。





(お釈迦さま誕生のシーン)



(出家の場面。左にはお釈迦さまの愛馬、カンタカ)



(燃燈仏授記：燃燈仏（過去世のブッダ）の足元にひざまずく青年は、お釈迦さまの前世の姿。青年が来世ではブッダになることを予言する)

ところで、このガンダーラ地方は仏像誕生の地だと言われています。紀元前四世紀ごろ、アレキサンダー大王がこの地域を征服したことで、ギリシャ文化が流入し、仏教と出会った結果、仏像が誕生したと伝えられています（同じ時期に、インドのマトゥラーでも仏像が生まれましたとされています）。

そのため、ガンダーラの石仏はギリシャ彫刻の影響を強く受けていて、肉体の盛り上がり方、骨・筋肉の表現、顔立ちなども日本で見る仏像とは雰囲気が多々違ってきます。



日本ではあまり見たことのないテーマを題材にした石像も多くありました。マヤー夫人の右脇からお釈迦さまが誕生するシーンや、夜に城を抜け出し出家する場合、ジャータカというお釈迦さまの前世譚を描いたものなど。昔の人は、このように石仏やレリーフを通して、お釈迦さまの生涯や前世譚を知ったのだらうなと思います。

また、前日に訪れた仏教遺跡、シャージ・キ・デリーから出土したカニシカ王の舍利容器もここで見る事ができました。

ペシャワール博物館を見学したあと、私たち北部のフンザを目指します。途中、マンセーラという町に立ち寄り、アショーカ王の碑文を見学しました。

アショーカ王は、紀元前三世紀ごろの人物で、インド亜大陸をほぼ統一したマウリヤ朝全盛期の第三代目の王さまです。仏教を厚く保護し、仏法に基づく政治を行った王として知られています。そのアショーカ王が、支配領域に建立した石柱・石碑があります。仏法に基づく統治理念が各地の文字で彫られており、古代インド研究の重要史料となっています。

碑文の多くはブラフミー文字（古代インド語の祖先）で書かれています。ここパキスタンのマンセーラで見された碑文は「カロシュティ文字」という現在では使われていない古代文字で刻まれています。（シャージ・キ・デリーから出土したカニシカ王の舍利容器にもカロシュティ文字が刻まれていました）

実際に現地でその巨大な石碑を目の前にし、彫られた文字を手でなぞってみました。二千年以上の間、風雨にさらされ、刻まれた線はすっかり薄くなり、肉眼で文字を認識するのは難しいほどでした。気が遠くなるような時間をかけて、雨水一滴、一滴が、岩の表面を削ったこ



（石碑に刻まれたカロシュティ文字）

とを思いました。
ちなみに、もう一つ、カロシュティ文字で刻まれた

碑文がパキスタンのシャーバーズガリというところにあります。二日目に通ったカイバル・パシュトウンクワ州の検問所からほど近くにありました。こちらにはパキスタン警察の許可が降りずに行くことができませんでした。

この石碑には、当時のギリシャ王たちの名前が記されていたことから、アショーカ王の治世がギリシャ側の歴史年代と結びつき、お釈迦さまの生きた時代を推定するための重要な手がかりとなりました。アショーカ王碑文の本格的な解説は、十九世紀前半にイギリス人学者、ジェームズ・プリンセプ (James Prinsep) によって進められました。

その後、私たちはさらに北へと進み、途中ナランという高原の町にきました。着いたのは夜の九時。標高は二八〇〇メートル、肌寒い気温です。温かいシャワーを浴びて寝ようと思いましたが、冷たい水しか出ず、諦めて早々にベッドの中に潜り込み、四日目を終えました。

(つづく)



臺南の朝

遠藤真美

旅先では早く目が覚める。

朝五時。南国の鳥特有の野太くクリアなさえずりが聞こえたので、二段ベッドからいてもたってもいられない気持ちで降り、カーテンを開ける。

ぬるい風に、潮の香りがする。白みがかった青空にくつきりとした太陽が昇り始めている。昨晩机の上に置いたペットボトルから水を少し飲み、ベッドの上のウエストポーチとカメラをつかんで、部屋から出る。

数日前から滞在しているドミトリーは、海沿いの住宅街にある。オーナーはおそらくサーファーで、部屋の一角にはシーグラスや大きな貝、海に関連する小物、自分で描いたと思しき絵が何枚かかかっている。玄関横の本棚には、台湾語訳された日本の漫画が並んでいる。

外に出ると、プルメリアの花の甘く濃い香りが漂っていた。隣家から道へ、競うように伸びた枝葉の先に肉厚な白い花が咲いている。花開いているのは数個なのに、香水の瓶を開けたような匂いがあたりに溶け込んでいる。

住宅街をゆつくり歩く。土地の狭さか都市設計ゆえか、石造りの民家には基本的に庭がない。そのかわり、玄関先や家と家の隙間に草木が植えられ、植木鉢が並べられ、成長した植物の枝やツタが屋根やベランダに巻き付き、そこに鳥がくる。密着度の高さに、見ただけでは家なのか巨大な植物なのかわからなくなっている建物も多い。

道路にはみ出す、鮮やかなブーゲンビリアの花。蜜を求め、ハナバチが花卉に潜り込んでいる。

民家の一角に小さな果物店があったので、こぶし大ほどのバンレイシを買い、皮を剥いてもらう。日本語でシヤカトウとも呼ばれるこのフルーツは、洋梨に似たこっくりとした口当たりと強烈な糖度が特徴だ。小さな切れ端を二つ食べ、フードバックに黒くて丸い種を吐き出す。残りは散歩のお供にしようと、ビニールに包んでポーチに入れる。

大通りに出ると、車と、色とりどりの原付が行き交っている。台湾は原付社会だという。信号待ちをしている運転手を見ると、高校生くらいの二人乗りから、出勤中のスリッポの女性、出前姿の老齢の男性などさまざま。車体やヘルメットの形や色も十人十色で、大きな通りに必ずある原付の修理店やヘルメット店で、好きな見た目

にカスタマイズしているようだ。歩行者はほとんどおらず、歩道がないところも多いので、轢かれそうになりながら進む。今度こそぶつかると身がすくむ時も、すんでのところで避けてくれる。できるだけ堂々と歩いた方が避けやすいのかもしれない。踏み出した足に力を込める。

細い路地に入ると、青い壁の民家の屋根のへりに、猫がいる。路地の先には茶色と黒のぶち模様の犬が走っている。台湾の路地は狭く複雑で、人同士すれ違ふことができないくらいのもある。

気の赴くままに路地をわたり歩くと、空気の色と匂いが変わる。鳥のさえずりが空に大きく反響する。見上げると一本の巨大なガジュマルの木が、あたりを覆っている。枝から垂れ下がる、何本もの白いツタ。巨木の下にはたいがい廟がある。

台湾では、徒歩五分圏内にいくつもの廟が点在している。廟では基本的に祖先の霊が祀られているが、有名な媽祖廟や関帝廟など、そこに暮らす人々が敬愛する英雄や古くから信仰されている神祇の廟も数多くある。廟にはいつも燈が灯り、外観と内観は赤と金色を基調に、カラフルで豪華な装飾が施されている。刺激の強い色に細

かな装飾がかけあわされても過度な豪奢さを感じないのは、信仰する人々によつて、柔らかに手入れされているからかもしれない。そこには数十年、数百年、かわるがわる丁寧にされてきたものだけが持つ、存在の確かさと光がある。

廟の外は誰もが座れるスペースになっていて、世間話に花を咲かせる中年の男女がゆるやかに集まっていた。飼い犬の散歩途中か、一人ベンチで、傍の犬と同じ方向を見てぼうつとしているおじいさんもいる。視線の先には赤い服を着た子供たちがはしゃいでいる。誰かが供えた線香の煙が白くたなびいていく。

廟に隣接した通りは市場で、野菜やフルーツ、とれたての魚や貝類、作りたての惣菜を売る店が並んでいた。商品棚を洗うホースの水音、玉ねぎを刻む包丁のリズム、まな板の上で削ぎ切りにされる魚。卸したての生肉を売る荷台と並ぶ人々。所狭しと並べられた巨大なスイカに気をとられつつ、屋台街に向かう。

屋台街は喧騒の中にある。何かを蒸す香りや油の跳ねる音、激しく蒸気のある鍋、シューウインドーを超えるほど高く山盛りにされた千切りキャベツ。原付の荷台

に積まれたブロックをよく見ると、粽を包む葉が括られている。

ふと食欲をそそる匂いがしたので「香茹飯湯」と書かれた看板の店に入る。ショーウィンドーの中には、両手でやっと抱えられる大きさのボウルに卵が積み上げられ別のボウルにはエビやモヤシが盛られている。店の前には原付が五台とまり、運転手が列をなしている。

厨房の脇に十人ほどが座れる食事スペースがあるので奥に座る。メニューの書かれた看板を指差して注文し、代金を払う。九十元。

屋台の外を眺めていると、目の前の店の脇からリュックサックを背負った子供と保護者らしき女性が厨房を覗き込む。慣れた様子で注文し、金属製の丸椅子に腰を下ろした子供は、「科学」と書かれた絵本を読み始める。ここで朝食をとり、それぞれ学校や職場へ向かうのかもしれない。コンクリートが剥き出しになった壁に這う樹木の根の上にスズメがすわり、こちらを見ている。

注文した品が差し出される。白いご飯にしいたけの汁がかけられ、茹でたエビと牛肉が添えられている。うまみのつよい香りとほのかな生姜風味。すべての景色から生まれた食事。

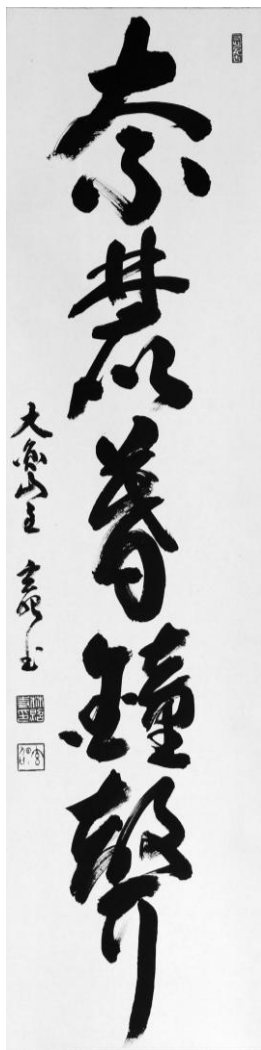
「いただきます！」



イラスト /

【お詫び】

鉄舟誌前号（七十六号）で令和七年度鉄舟禅会書道展のご報告をいたしましたが、誤って高田玄昭和尚の前年の作品を掲載してしまいました。衷心より深くお詫び申し上げます。ここに改めて正しい御作を掲載させていただきます。誠に申し訳ございませんでした。



奈麓暮鐘聲（奈麓暮鐘の聲）

なろくぼしょう

— 禅林句集参照 —

高田 玄昭 和尚

鉄舟禅会 行事予定

令和八年 五月

二日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時
九日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時
十六日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時
二十三日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時
二十四日	(日)	日曜禅話会	八時	九時
三十一日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時

同 六月

六日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時
十三日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時
二十日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時
二十七日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時
二十八日	(日)	日曜禅話会	八時	九時

同 七月

四日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時
十一日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時
十八日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時
二十五日	(土)	土曜坐禅会	八時	十一時
二十六日	(日)	日曜禅話会	八時	九時

諸事情により予定が変更になる場合がございます。
 随時、ホームページでお確かめください

<https://kohon.org/>





令和八年五月九日 発行

発行 鉄舟禅会

編集 鉄舟禅会出版部

東京都中野区中央一―七―三

電話〇三(五三三八) 九三二〇

印刷 恒信印刷株式会社

東京都板橋区板橋二―八―八

電話〇三(三九六四) 四五一一

* 乱丁・落丁本がございました場合は
お取り替えます

「鉄舟会理事会」郵便口座

00190・3・579820